

「ジェンダー」と「ハラスメント」の 特別展示開催にあたって

立教大学図書館長
中村百合子

私たちの誰もが社会的な存在である以上，“ジェンダー”や“ハラスメント”といった言葉と今の時代，無縁ではいられないだろう。いったん学ぶと，常に自らのものの見方やふるまいを見直すきっかけを与えてくれる大切な言葉であることにも気づく。こうした言葉について知識を得て理解し，また人権の感覚を身に着けることは，大人になるプロセスにおいて求められていると思う。

この春，副館長の北島健一先生に紹介していただき，「未来を花束にして」という映画を観た。この映画の原題はSuffragettesとされていて，このサフラジェットという言葉は，20世紀初頭にかけて英国で起きた女性の参政権運動に参加した女性たち，中でも最も戦闘的であったWomen's Social and Political Union (WSPU)に所属した女性たちを指すという。人権の歴史では，マハトマ・ガンディーらの「非暴力」の思想や運動がしばしば理想的なものとして語られるが，現実の歴史は過激だとか急進的だとか言われた人たちによって進められた一面もあることを，この映画で改めて知ったように思った。複雑な気持ちになる映画だが，この複雑な気持ちこそ，人間の思考の燃料となるものでしょうから，この短い紹介文で何かひっかかった方はぜひ観てみてください。

それ以外にも，学内のジェンダーフォーラムと人権・ハラスメント対策センター，また図書館のスタッフが選んだおすすめ本や映画がたくさん並んでいます。どうぞ手にとってください。

